



Title	『片小ナビ 保護者のための片山小学校ガイドブック』づくりから見えるもの
Author(s)	金子, 伊智郎; 小野田, 正利
Citation	大阪大学教育学年報. 2003, 8, p. 13-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9306
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『片小ナビ 保護者のための片山小学校ガイドブック』

づくりから見えるもの

金子 伊智郎

小野田 正 利

【要旨】

大阪大学大学院人間科学研究科・教育制度学研究室では、吹田市立片山小学校（通称・片小）において、2000年度から『片小ナビ 保護者のための片山小学校ガイドブック』という冊子を作成している。この冊子は——①片山小学校とはどんなところか、その等身大の姿と将来的な学校目標②保護者として何ができるか、何を知っておかなければならないかということ③片山小学校に密着した、教育に関するいくつかの情報やデータ④電話番号簿や住所録、また書類入れなどに使えるフォルダ——などによって構成されている。「第1版」は2001年4月、「第2版」は2002年2月に発行され、それぞれ片山小学校の全児童（約1100名）に配布している。現在は「第3版」を作成中であり、これは2003年2月に発行予定である。

本研究ノートは、2001年の夏、『片小ナビ』第一版作成に関わって、それまでに書きためたフィールドノーツやインタビュー集などをもとにして、主に金子が作成したものである。調査の過程で見えてきたものは、保護者に対する小学校の防衛的な態度である。本稿ではその理由を「保護者からのイチャモンを恐れているためだ」と分析している。

大阪大学大学院人間科学研究科・教育制度学研究室では、吹田市立片山小学校（通称・片小）において、2000年度から『片小ナビ 保護者のための片山小学校ガイドブック』という冊子を作成している。この冊子は——①片山小学校とはどんなところか、その等身大の姿と将来的な学校目標②保護者として何ができるか、何を知っておかなければならないかということ③片山小学校に密着した、教育に関するいくつかの情報やデータ④電話番号簿や住所録、また書類入れなどに使えるフォルダ——などによって構成されている。「第1版」は2001年4月、「第2版」は2002年2月に発行され、それぞれ片山小学校の全児童（約1100名）に配布している。現在は「第3版」を作成中であり、これは2003年2月に発行予定である。

作成の動機は、「学校の実像（等身大の姿）を、関係者（子ども、親、教職員そして世間）が“きちんと理解する”ことが、おそらくもっとも大事なことだと痛感した」（小野田2002,p.59.）ことである。「親自身が、学校の仕組みや内容をわかりやすく学ぶ機会がないこと、学校や教育委員会からは相当量の情報が提供されているにもかかわらず、どちらかといえば自らの学校体験や耳学問的な経験則に基づいて認識し行動している現状ではないのか。したがって参加や協力や連携の前提条件として、学校そのものへの『共通理解の形成』が、何よりも大切ではないか」（同pp.60-61.）といった小野田の直感が、『片小ナビ』を構想した理由である。

我々の目標は『片小ナビ』をつくることだが、その性質上、我々は片山小学校について詳しく知る必要がある。そのために、教育制度学研究室の助手（金子）・大学院生・学部学生が週に2～3日程度片山小学校に入り込み、日常の授業や行事等を手伝いながら文書収集やインタビューを一行うという方法をとった（2003年2月現在も継続中）。したがって、変則的ではあるが片山小学校において参与観察調査を行ったといっている。その入り込みの過程において、『片小ナビ』に反映できなかった情報や、片山小学校との興味深いやりとりの記録はかなりの量にのぼり、副次的にはあるが様々な着想が生まれている。だが、そもその目的が参与観察調査ではなかったこと、また片山小学校という学校名が特定されてしまうことから、調査報告や論文化をさほど考えていなかった。

本稿は、2001年の夏、『片小ナビ』第一版作成に関わって、それまでに書きためたフィールドノーツやインタビュー集などをもとにして、主に金子が作成したものである。当時は趣味的に記録していた金子の個人的なフィールドノーツや、大学院生・学部学生の報告を一編にまとめることを第一の目的としたため、

論文の形をとってはならず、呈示されているいくつかの仮説も検証はされていない。また、現在読み返してみるといささか論理的に浅い印象もある。が、『ナビ』作成過程での調査のあり方が最もよく現れている資料ではある。

本稿の公表許可は片山小学校長に2002年5月時点でいただいているが、個人が特定されることをおそれてこれまで公表を控えてきた。しかし、『片小ナビ』作成過程で生まれた知見を公表する時期にきていることを鑑みて、できるだけ個人名を明らかにしない形で、遅まきながら公表することにした。当時ゼミ等で使用することも考え、「学部二、三年生に直接語りかける」文体としたため、特に前半はくどい語り口になっているが、現在の知見を最小限に反映した注釈をつけ、登場人物をアルファベット化した以外はほぼ原文のままで提示する。

0. 評価の視点

『片小ナビ』の評価については、立場によってさまざまな見方があるかと思います。本稿はあくまで金子が金子の視野に入ったものを金子の視点から評価していこうというものになります。したがって、どうしても一面的になってしまうのは否めません。

だからといって本稿が裏付けのない駄文に過ぎないというわけではありません。『片小ナビ』作成過程における金子の位置はかなり興味深く、そこから引きだされる知見もまた興味深いだろうと思うからです。

学校でもなんでもいい、ある集団の中に異分子が入り込む場合、その集団は何らかの反応を示します。拒絶反応や無視、その逆に下手に出るとか慇懃無礼であるとか、また妙に歓迎されることもあるでしょう。

『片小ナビ』の場合、ある集団の内実を異分子が調べるという構図です。異分子がどうやって集団を知るのが。顕微鏡でバクテリアの構造を調べるように、対象に全く影響を及ぼさない（少なくともそう考えていい）視点で調べることはできるのか。

金子は無理だと考えています。集団・異分子はどちらも人間であり、人間同士が接触する以上、お互いが全く影響を与えあわないとは考えられないからです。異分子が入り込むことによって集団は多少なりとも変わるし、異分子の側も集団に影響されて自己の規範をつくりかえてしまいます。むしろ、そんなことがおきない接触には何の意味もないでしょう。でも、そうだとしたら、異分子は集団のことをどう記述すればいいのか。つまり、我々が顕微鏡の視点を持ち得ないとしたら、どういう視点で対象を見ればいいのか。

それは、異分子が入り込むことによって引き起こされる反応を見るしかありません。そしてその反応は、どんな性質の異分子が入ってくるかによって変わります。具体的にいえば、小野田先生への反応とAS・IM¹⁾に対する反応とは当然違います。もっといえば、職員室に初めて入る場合、スーツを着た人とジーンズにTシャツの人とでは、教職員の対応も変わるでしょう。

例えば、スーツを着て片山小学校に行った人が教職員に丁寧な対応をされて「礼儀正しい学校だな」という感想を持った。一方ジーンズにTシャツの人が「何じゃおまえは」という対応をされて「なんてひどい学校だ」と思ったとする。この場合、両者の感想はどちらも正しいといわざるをえません。

じゃあ、ホントのところ、片山小学校は礼儀正しい学校なのかひどい学校なのか——こんな問いは無意味です。この例からとりあえず引きだしてもいい結論は「片山小学校は来訪者の服装によって対応が変わる」です。

あたりまえというなかれ。もう少し突き詰めると、客観性をどう成立させるかという問題に突き当たります。

「スーツを着ていった人が丁寧な対応をされた」

これはまあ事実だとしましょう。しかしこの事実と、

「片山小学校は『礼儀正しい学校だな』と思った」

という感想には飛躍があります。だって、「だからといって片山小学校が全体として『礼儀正しい学校』であることにはならない」からです。そんな主観的な感想をもって片山小学校自体を云々することはでき

ません。

じゃあ、「礼儀正しい学校だな」という感想は、片山小学校の少なくとも一面については正しく言い当てているといえるのか。

そんなことはいえませんね。なぜって、服装によって対応が変わる学校が、果たして礼儀正しいのかどうかあやしいもんだからです。そうすると「礼儀正しい」の意味から考えないといけません。これは迷宮入りです。

でも、少なくともスーツを着ていった人が丁寧な対応をされ、「礼儀正しい学校だな」と思ったことは間違いない。ただの勘違いではありません。ここは疑えないのなら、ホントのところ、「礼儀正しい学校だな」という感想はいったい何なのか。

これを解きほぐすには、「礼儀正しい学校だな」という感想を、片山小学校という集団とスーツを着た人という異分子とが関係を持ったときに起こった反応なのだと考えなければなりません。こう考えて初めて、「礼儀正しい学校だな」という感想が意味を持ってきます。

反応の仕方は、その集団と異分子との関係が何であるかによって一次的にきまり、二次的にはその両者の個性によって決まってくるといいと思います。この場合ならば、「片山小学校」という公立小学校と、そこにふらりと現れた「来訪者」という関係が、出会ったときの反応を一次的に規定します。だって、「視察に来た教育委員会の人」じゃないし、「子どもが先生に殴られたので怒鳴り込みに来た保護者」なんかじゃないわけだから、両者が出会うことによって引き起こされる事態（反応）は自然に絞られます。

二次的には、この場合次のような個性があるでしょう。

片山小学校（北摂・吹田市の公立小学校。かなりのマンモス校であるが、JRの官舎が多数を占めるせいもあって校区は比較的穏やか。その分見慣れないものに対する忌避傾向は強いかな？）

スーツを着た人（見るからに給与所得者。堅実なホワイトカラー。社会人としての礼儀作法をきちんと内面化している人物？）

この両者が出会ったときに、「礼儀正しい学校だな」という比較のおだやかな反応が起こったと考える。これでやっと、「スーツを着て片山小学校に行った人が教職員に丁寧な対応をされて『礼儀正しい学校だな』という感想を持った」という事態がとりあえずの客観性をもって記述できるわけです。記述してみましょう。

「片山小学校とは、スーツを着てやってきた人に『礼儀正しい学校だな』と感じさせるような何者かであり、その人とは、片山小学校に礼儀正しい対応をさせるような何者かである」

もう一步進めてみます。

以上の記述は、片山小学校（あるいはスーツを着た人）に関する記述ではなく、「スーツを着ていった人と片山小学校との関係」についての記述です。ですから、ある人が何かについて言及する場合は、必然的にその人自身のことも物語ってしまうことになります。

M中²⁾を訪問したときに、「すごく荒れた学校だ」という印象を持った人と「懐かしいなあ」と思った人がいるでしょう。

「M中はすごく荒れた学校だ」という記述は、当たり前ですが、同時に次のような記述も含んでいます。「自分のいた中学校では教師にむかって大声を出すような生徒はいなかったし、身の危険を感じるような行為を見たこともなかった」。一方、「M中は懐かしい雰囲気でした」という記述は、「自分の通っていた中学校もこんな感じだった」という記述を含んでいます。同じ現象を見ても、見る人によって記述の仕方が正反対とっていいくらい変わるのには、どちらもM中そのものについて言及しているわけではなく、M中と訪問者（この場合我々）との関係を記述しているからです。記述できるのは「記述する側」と「記述される側」との関係だけです。さしあたって客観的に言及するには、やはり次のように記述しなければなりません。

「M中とは、自分に対して『すごく荒れた学校だ』と感じさせるような何者かであり、自分とは、M中を見て『すごく荒れた学校だ』と感じてしまうような何者かである」

結局のところ、さしあたっての客観性を維持するとは、自分が主観的であることを自覚し続けることしありません。徹底的に主観的であり続け、その主観性を自覚しながら「見る側」と「見られる側」双方の影響関係として物事を記述することでしかアリバイは成立しません。

片小なりM中なりに入っているうちに見えたこと・感じたことを、集団と異分子とのあいだの反応として捉えること。どうしてそんな反応が起こったのかを考える（相手の立場と自分の立場との関係、また相手の個性と自分の個性とのかねあい、出会ったときの状態や出会い方など）こと。反応の例をできるだけ多く積み上げ、その反応を解釈することのできる多くの仮説を立て、どんどん棄却していくこと。異分子として一緒に入り込んだ連中の中に自分とは違った反応を起こしたヤツがいれば、最も重要なデータとして勘定に入れ、反応のちがいの原因を探ること。そうやってあつめた反応の事例を統一的に解釈できる記述のありかたを探ること。我々はこういうやり方しかできないのではないのか。

『片小ナビ』でいうならば、我々は、ある理由があつてガイドブックをつくりたかった。そのためには片山小学校のことをくわしく知る必要があり、一定継続的に入り込まなければならなかった。ところが片山小学校にとっては降ってわいた話。「開かれた学校」というかけ声もあるし、受け入れるにやぶさかではないのだが、かなり迷惑な話ではある。両者の利害関係はさまざまな場面でバッティングし、あるいは一致します。そこには「小学校」と「大学」というお互いの社会的な肩書きだけでは済まされない集団と異分子との衝突が起こります。小野田先生と金子、金子とIM・ASとでは、片山小学校との衝突のあり方が違って当然ですし、違ってあるからこそ片山小学校の輪郭がおぼろげながら見えてくるのだと思います。

本稿では金子の視点に立った片山小学校と『片小ナビ』を記述していきます。あくまで金子の主観を片山小学校との関係（あるいは片小プロジェクトとの関係）で描き出したものですので、このほかに金子以外の方々の視点を加えることによって、『片小ナビ』と片山小学校の姿により近づけると思います。

1. きっかけ……小野田プロジェクト³⁾の動機

『片小ナビ』は小野田先生の発想ですから、我々が片山小学校に入り込む場合、小野田先生の発想に一次的に規定されます。個々人がそれをどう内面化しているかどうかは別ですが、さしあたって小野田先生の着眼点を金子が内面化した範囲でまとめておきましょう。ひらたくいえば（以下、重大な問題のない限りひらたく書き続けます）、「我々が片山小学校に入った動機」です。

小野田プロジェクトの着眼点は、要約すれば、「特定の小学校に特化したガイドブックをつくることにより、地域・家庭・学校の果たすべき役割を明確化し、この三者が子どもの教育に主体的にかかわり協力することができるきっかけをつくる」でした。金子の理解ですが、まあ大筋では正しいと思います。しかし、この着眼点が内包している問いかけをここで明文化することの方が、本稿にとってはより重要だと思います。

小野田プロジェクトの背景となっている問題意識は、ひとことでいえば「研究者は現場の研究として何ができるのか」でした。その問いに対して、『片小ナビ』づくりという実験で答を出そうというプロジェクトでした。この発想が『片小ナビ』のありかたを規定するとともに、潜在的には重要な問題を提起しています。金子も最初は気づいていなかったのですが、後知恵で述べてみましょう。

「研究者は現場の研究として何ができるのか」という文章は、文脈に明らかな価値を含んでいます。つまり、「何をなすべきか」という問いかけです。もちろん、教育の世界は価値が前面に出てくるものですから、「何をなすべきか」という問いかけ自体はさほど珍しくはない。しかし政策決定レベルではなく研究レベルで、「何をなすべきか」に対して「これ（『片小ナビ』）をすべきじゃないのか」と答え、しかもそれを実行するというのは、実は非常に珍しいことなのではないかと思うのです。

研究者は、普通は「何がどうなっているのか」を探ります。それを知ったうえで派生的に出てくる「だったら何をすべきか」という問いを考え、機会があれば現状に適合する方針を出す。これなら研究のあり方として順当な手順です。

ところが小野田プロジェクトは違った。まず「何をなすべきか」があり、そのために「何がどうなっているのか」を探る必要があった。『片小ナビ』をつくることが決まっているのに、片山小学校のことを全く知らない。普通とは逆の手順なわけですね。

もちろん小野田先生の中には「何がどうなっているのか」という通常の問いかけに対する答はあったはず。だからこそ『片小ナビ』をつくるべきだ」という方針が出たわけで、その意味では順当な手順を踏んでいます。ただし、小野田先生の中にも飛躍がある。小野田先生が「何がどうなっているのか」をきちんと把握していたとしても、プロジェクト発案時点で片山小学校についての知識はほとんどなかった。順当な手順を考えるならば、『ナビ』をつくるのに適した学校を検討すべきだったでしょう。しかしそんなことはお構いなし。

そもそも、プロジェクトの対象として片山小学校を選んだ過程が何の必然性もないままでした。開明的な視点をもった校長がおり、また校長・教頭の関係がうまくいっているところを、知り合いの教育委員会の人に頼んでさがしてもらったら、それがたまたま片山小学校だったというだけの話です。片山小学校である必要はどこにもない。それどころか、片山小学校が『ナビ』を必要としているかどうかすら考えていない。ならば、「何をなすべきか」の答が『片小ナビ』である必然性はないに等しいじゃないか。

おそらく、研究者としてのキャリアの中で、小野田先生の感覚として「ナビが必要だ」という答はあったのでしょう。しかし必ずしもそれが唯一の答であったとは限らないし、実際にほかにも答はあるはずです。なのに、出た答は『片小ナビ』だった。この時点で小野田先生は飛躍しました。「四の五のいわんと学校の助けになりそうなことをやろうや!!」という形で。

小野田先生の飛躍は、結果的には、順当とされる手順を少なくとも部分的に否定しています。「何がどうなっているのか」が完全にはわからなくても、「何をなすべきか」の見当がある程度ついていれば、そちらを優先する。この飛躍をうけいれて初めて『片小ナビ』の必然性が理解できます。そしてこの飛躍が、小野田プロジェクトが潜在的にもっていた重要な問題提起であり、一種の宣戦布告であると思います。IMに対するID先生の質問⁴⁾「どうして片山小学校を選んだの？」が小野田プロジェクトにそぐわないのは、この飛躍が普通はあり得ないものだからです。我々は、片山小学校を選んだ理由なんて考えたこともなかったし、考える必要もなかったのです。

小野田先生のこの飛躍は、フィールドワークの現場レベルでは、通常の手順を逆転した思考法となっはね返ってきます。「何をなすべきか」が決まっている。しかし「何がどうなっているのか」がわからない。必然的にフィールドワークのあり方が導き出されます。「何をなすべきか」を正確に把握し、それに沿う形で「何か」をやってみることを通じて、「何がどうなっているのか」を探り出すという手順となります。つまり、『片小ナビ』の完成型を常に想定しながら調査を進めること。その過程で『ナビ』のありかたを模索し、作成作業を通じて片山小学校の全貌をつかむこと。

片山小学校に通う中で、我々はおそらく『ナビをつくるべきだ』という価値観を身にまといながら子どもや先生と接していたはず。インタビューの時などの色々な先生の反応は、我々のこの動機と無縁で記述するわけにはいかないでしょう。我々の目に映った子どもたちだって、子どもたちそのままの姿を我々は見ていたわけではなく、「ナビづくり」というフィルターをかけながら見ていたはず。我々は『片小ナビ』をつくるために片山小学校に入り込んでいた。このことは本稿にとって前提となる視点です。

2. 片山小学校の動機

小野田プロジェクトは片山小学校にとって見れば降ってわいた話であったし、現在もそうであり続けている。このことは『片小ナビ』を評価する上での基本的な視点だと思います。この「降ってわいた」とい

う状態を基本ラインとして、時によってネガティブになったり肯定的な評価をしてみたりという上下動がある。また先生の個性によってもばらつきがあるでしょう。でもやっぱり、いつでも誰にとっても「降ってわいた話」であることにはちがひありません。

片山小学校が小野田プロジェクトに乗った理由は、校長先生が端的な表現をしています。

私自身も、「学校を開く」のはいいことだと内心思いながら、では「学校が保護者や地域の方にもっと身近に捉えられ、学校の門を越えた人の行き来が頻繁に行われること」だと単純に考えますが、どうやら正解はそれだけでもなさそうです。その答を見つけたすためにも、一緒に考えてみることも大事なかなと思い、小野田先生の研究への協力を快く引き受けることになりました。⁵⁾

(『片小ナビ』p.4, 下線は引用者)

当然のことですが、片山小学校は『片小ナビ』完成時点においても受け身の態度だったことは、下線部から明らかです。『ナビ』が流通しだしている今現在も校長の姿勢が変わっていないのかどうかについては一考の余地がありますが、よほどの状況証拠がない限り、受け身の状態であり続けていると考えた方がいいでしょう。この状態は、『ナビ』がどこでどう評価されるのかとは一定独自に成立していると金子は思います。現在校長の態度が豹変しているとする、それはそれで大問題、『ナビ』は学校制度に革命を起こすためのカギなのだとということになってしまいます。革命はおそらく校区撤廃という形で行われますから、校長が受け身であった方がありがたいといえます。

もう一点、校長の動機(希薄ですが)は、「学校開放」に特化している点に注目すべきでしょう。なぜって、『片小ナビ』は学校開放を実現するためのものでは必ずしもなく、第一義的には学校と家庭との信頼関係を作り上げるためのものであると説明されているからです。それが校長の中では学校開放を考えることに直接つながっている。これは、校長の原稿を初めて読んだときの違和感として、金子の中に残っています。

もちろん大学生が片山小学校に通うことこそ学校開放の一環と捉えてもかまわないし、その意味では校長が学校開放に特に言及することもおかしくはないでしょう。しかし逆にこんな仮説を立てることはできません。

「片山小学校の側は、保護者との信頼関係を今以上のものにすることについて、それほどの関心を抱いていない」

この仮説を棄却するのはかなり困難であるように思います。『片小ナビ』が志だけ高くて肝心の中身はヨヨイのヨイだったとするならば、その意義は小学校が外部のものを受け入れたということ程度に過ぎないともいえるわけですが。

いずれにしても金子は、この仮説はかなりの部分あたっているのではないかと考えています。

片山小学校が我々を受け入れた動機を示唆するものとして、金子が教頭先生から聞いた言葉があります。「私としては、ガイドブックが完成することよりも、その作業の過程で保護者の考え方や意識が見えてくるかもしれないという方に期待している」——なるほど。膝を打つ言葉です。

片山小学校の側は、さしあたってすぐに何かをやらなければならない火急の課題はない。しかし、漠然とした危機感や焦燥感はある。外部の人間をうけいれて新しいことを何かやってみれば、その根っこが少しはわかるのではないかと——片山小学校が我々を受け入れた動機はこういうことだったのでしょうか。

で、『片小ナビ』をつくることで何かわかったか。おそらく、さして何かが目に見えてわかったわけではないと思います。『片小ナビ』が片山小学校の何を突き、何を突けなかったのかを正確に評価するには、まずお互いの動機から摺り合わせ、それがどの程度達成されたかを確認することからはじめなければならないはずです。そうじゃないと、学校評議員制度と同じような空虚なものに終わってしまう⁶⁾と思います。実験企画としての『片小ナビ』のいいところは、これからそれができるとということです。

3. 片小PTAの動機

『片小ナビ』は保護者のための片山小学校ガイドブックです。その性質上、教職員よりもPTAの保護者の方々の方が親和的といえるでしょう。

ここで正直に告白してしまえば、金子はPTAという組織に対して明らかにネガティブな印象を持っています、それは『片小ナビ』が完成した現在でも変わっていません⁷⁾。

今回もPTAの人と接触したごく初期の時点で、我が子が在籍するクラスに障害をもつ子がいて、その子のことを「苦虫をかみつぶしたような」顔で話すお母さんに会ってしまいました。PTA運営委員にも障害児をもつお母さんがいるのに、です。その時点で金子のイメージは強化されてしまいました。

こういうイメージを持つ人間がPTAと関わりを持つ場合、反応の解釈がどうしても根性の悪いものになってしまいます。もちろんPTA委員がみなそうだというわけではないでしょうし、金子のネガティブなイメージが払拭される可能性はいつでもあります。具体例というか、我々との関わりの中でPTAの積極面を見た人はご一報いただきたいと思います。

とにかく、教職員に比べると積極的であった（ように見えた）PTAですが、金子との関わりの中で見えてきた、PTAが『片小ナビ』作成に協力する動機を中心は、担任との関係でした。

保護者の興味の中心は、学校がどうのこうのではなく、担任がどんな先生なのかであるようです。そして、いったん担任に対する悪い印象がつくられると、それが微妙に尾ひれのついた形で保護者のあいだに知れわたっていく。我が子が在籍するクラスを、学校の外から双眼鏡で監視している人もいるという、ぞっとするような話を聞きました。そういう状態の怖さと、そんな話がPTAのなかでささやかれているという怖さ。

どうしてこんな不信感がうまれるのか。「担任として明らかに質の悪い教員」がたまたまいたのだといってしまうえば簡単です。しかし、個人として表に出てきた問題は、とにかくいったんは「集団全体が構造的にもつ何か」が、具体的に現れてきたのだと考える。つまり何の裏付けもなく「外れ値」と考えてしまわない。これがある集団を分析する上での鉄則だと思います。なにより、PTAの方々も、一人の変わり者の話をするような言い方ではなく、「そこまではしないけど、気持ちはわかる」という感じでした。

小野田プロジェクトの序盤の時点で、保護者の学校に対する底の見えない不信感を『片小ナビ』はやわらげるものであるべきだ、少なくともその不信感がかくあるものだというところを、作成する過程で把握していかなければダメだと思いました。不信感の理由としてはいくつか簡単に考えられます。しかし、そのいくつかを構造的に解釈できる記述のあり方が必要だと思います。それがわかれば、そのツボを押すことによって症状を回復できるはずですが、『片小ナビ』が果たしてそのツボにあたっているのか。少なくとも、そのツボをさがすためには有効であったと考えたいのですが、まだ何ともいえません。

4. 調査：前半

片山小学校の調査は、先に述べたとおり倒錯的なあり方でした。枠組みが決まっていて、それに合うようなデータを集めていくという、字面だけ見れば「そんな無茶な」の調査です。そんなやり方で何かわかるのか？——しかしこれがある意味非常に有効な調査法であることは後に述べます。

倒錯的な調査法だったとはいえ、序盤から中盤にかけては参与観察法のオーソドックスなスタイルでした。片山小学校に「無害な中立者」として入り込み、子どもたちや教職員と一種の「仲間」としてふれあいながら情報を集めていくという形です。実際問題それしかやりようがないのですが。

今回は、何らかの形で我々が片山小学校の役に立つために、机運びやプール掃除から始めました。悪くない入り方ですが、「役に立った」とは考えない方がいいと思います。いくら学校が高齢化しているとはいえ、学生なんかアテにしくても運営は成り立っているわけだし、また成り立っていないとは思いません。ただし、我々が本気であるということは、具体的なお手伝いを通してわかってもらえただろうとは思いますが。

校長室を除けば、その後の我々の入り込みの基盤は「太陽学級」（障害児学級）⁸⁾と「クラブ」⁹⁾でし

た。通常の授業にはあまり顔を出していませんし、参与観察としては不十分な入り方だとは言えます。

でも、いいわけをさせてもらえば、フィールドワークは不十分で当たり前です。「無害な中立者」をホイホイと受け入れる集団なんてありませんし、受け入れたとしたら、何か下心があることを疑わなければいけません。だいたい、うまくいかないという状態自体が重要な情報です。フィールドにはいると針のムシロに座る気分になるくらいがちょうどいい。穏やかな反応より激烈な反応の方がわかりやすいと思います。

序盤から中盤にかけて、太陽学級とクラブを基盤にしながらの入り込みを通して考えていたのは、「学校と保護者とを隔ててしまうような構造があるはずだ」ということでした。つまり、「学校と保護者とのこんな関係が、構造的に信頼関係を損なっているのだ」という記述をしたかったわけです。

ところがいざ学校に入ってみると、当たり前ですがそんな簡単なものではありませんでした。よく「学校には壁がある」といいますが、たしかにPTAの人々もが「敷居が高い」という言い方をしていましたが、これといった具体的な壁が見あたらないうのです。

「何か言いたいことや訊きたいことがあればいつでも保護者に来てもらってかまわない」というのが、インタビューをとれた先生全員に共通した言葉でした（ホンネとは限りませんが）。学校の門は昼間いつでも開いているし、PTAのお母さん方も何の断りもなく校内をうろついている。校長先生は、指導要録さえ「いつでも見せるで」といってました¹⁰⁾。何だ、壁なんてどこにもないじゃないか。おたがいに「壁がある」と思いこんでるだけじゃないのか？——こんなことを教頭先生に言ったら笑われましたけど。

だったら何で「敷居が高い」のか。単純な仮説を考えてみました。

「自分が子どもの頃の教師—生徒関係が、親になっても強い印象として残っていて、それが職員室に行きづらい気分にならせてしまう」

なぜなら金子がそうだからです。小・中・高と一貫して「先生は怖い」という印象を持ち続け、それがいまだに残っていて、特に教頭先生みたいなタイプ（後述）と話すときはもう、ヘビに睨まれたカエルようになってしまうのです。みんなそうじゃないのかなあ。

でもまあ、AS君にこの仮説をおつけてみると「ボクはそんなことないですよ」と返ってきたので、別に一般性のある仮説ではないようです。ただ、表面的とはいえ金子にはそう見えてしまったとすれば、そんな印象を生み出している背景がある可能性は捨てきれないので、この仮説を掘り下げると面白いかもしれません。ちょっとした関連はあると思います。

もうひとつ、冗談半分ですが「子どもを人質に取られている」というPTAの人の言葉がありました。これだけ聴けば激烈といっていいいくらいですが、そのココロは「担任に何か抗議したりして関係がまずくなってしまうと、学校で自分の子どもがどんな目に遭わされるかわからない」ということで、やっぱり激烈ですね、意味も。

特定の担任個人に対して思っているのか、あるいは担任制というシステムに対してそう思っているのかはわかりません。まあ後者だと考えておいた方が無難でしょう。でも「何でそこまで思ってしまうのだろう」という疑問は、いまだに解けていません。

とにかく、学校と家庭とを構造的に分断しているものが何なのかを知りたい。それがわからないと効果的なガイドブックにはならないでしょう。その意味で「もしかしたら」と思ったのは、RG先生でした。

金子が行きがかり上通っていた将棋クラブの顧問がRG先生（とOK先生）でした。プロジェクトスタート当初から、我々のことを嫌がっている先生として名前が挙がっていたのですが、実際に接してみると、思った以上の難物でした。

何より、全く愛想がありません。会話は「こんにちば」まで。しばらく通っていても、話をするとかかりすらみつかりません。特にアンケート調査をするときには、あからさまな不満の意を表明されたりして、金子もかなり往生しました。その間にも少しずつRG先生の人となり伝わってきました。教頭先生によれば「変人」。しかしPTA委員の人からは信頼できる先生のうちの一人として名前が挙がってくる。子どもたちにとっては「怖い先生」系のバリエーションでしょう。これはごく最近聴いたのですが、クラス運営に支障をきたしてしまった（どんなものかはわからないし、本当なのかもわからない）こともあるようです。

RG先生は、金子の目には非常に防衛的であるように映りました。屋上屋を重ねて分析してしまえば、RG先生の個人的な領分とでもいうものがあり、そこに入ってこない限り他人とは積極的にかかわろうとはしない。自分の仕事の境界線を人から乱されるのを嫌う。その「領分」に関してはないがしろにしないかわり、自分が積極的になれないことに対してはいっさい干渉しない。そんな先生であるように見えました。

RG先生はおそらく、「学校と保護者とを分断しているもの」とか「信頼関係を回復する方法」とか、そんなことにはほとんど関心を持っていないと思います。『片小ナビ』なんかもってのほかでしょう。「教育」という仕事をもつ「やりがい」めいたものを、あきらめてしまっている気がします。

金子は、RG先生が「どうもこうもならんで」と思っている部分が正確に知りたかったのです。RG先生があきらめている部分は何か、枯れてしまっている部分は何か、たぶんそこが、学校が行き詰まっているところと重なっているはずです。もちろんRG先生が意識しているかどうかわかりませんが、RG先生からインタビューがとれれば、そこから「学校と家庭とを分断している構造」を解きほぐすことができるだろうという気が、金子にはありました。

RG先生からは野良犬を追い払うような仕草でインタビューを断られた¹¹⁾のですが、それによってむしろ「ツボはRG先生だ」という思いが強まりました。どうしてって、入手困難な情報こそが最も重要な情報であるというのは鉄則ですから。

しかしまあ、短期的にはインタビューなんか無理でした。よって、金子の疑問をとく糸口がみつからないまま、片山小学校への入り込みは後半戦の「ナビ」づくりに入っていきます。

5. 調査：後半

9月に入り、純粹にスケジュールの問題として、『ナビ』の具体的な内容を決めなければならなくなりました。このころから参与観察調査としては倒錯的なあり方となります。

校務分掌表などのフォーマルな情報を利用して目次案を作り、それに各人の問題意識を加えながら練り上げていったのですが、その過程にはこれまで述べたような金子の疑問はほとんど反映されていません。後に教頭先生にも漏らしたことがあるのですが、「このナビはやっぱりツボをはずしていると思うんですよ」という実感は、目次案を作ったときに始まり、現在まで続いています。「学校と家庭とを分断する構造」が最後までわからなかったからです。しかし、金子の問題意識とは一定離れた形で『ナビ』づくりを進めなければならない。原稿書きが視野に入ってくる時点では、ナビの目次案に沿った形での調査を行うことになります。自然、目次案に直結したインタビュー調査が中心になります。「RG先生のインタビュー？何それ？」ってなもんです。ほかに話を聞かなきゃならない先生がたくさんいます。

金子のインタビューは、保護者と学校とのトラブルとその解決場面が主な項目でした。話を聞いた何人かの先生に共通していた言葉は、「学校の悪口を子どもに対して言うことはやめてほしい」でした。保護者の学校不信がとめどなく子どもに伝染してしまい、子どもも学校不信になってしまう、ということです。だからこそ「いつでも保護者の方に来てもらってかまわない」というのでしょう。

トラブル発生の兆しがあれば、早い段階で保護者と学校とが連絡を取りあうことが問題解決のいちばんの方法である——このことは『片小ナビ』にも文章として載せています。そりゃまあ正論ですし、実際のその通りでしょう。でも、この論理にはやはり欠陥がある。

ひとつは、なぜ「学校不信が親子の間で拡大再生産される」という事態が生じてしまうのかということです。これは繰り返し述べているように「保護者と学校とを分断する構造」のためだと金子は考えたいわけですが、その構造が打破されないうちは、学校不信の拡大再生産はいつでも起こりうるという形になります。「早い段階で保護者と学校とが連絡を取りあいましょう」というだけでは問題解決になりません。

もうひとつは学校不信そのものが生まれる原因です。

「学校不信」といっても多くの場合は「担任不信」だと思われます。しかし、担任個人の資質の問題に

還元することは安易すぎる。学校システム自体が担任不信を生みやすい構造になっていると考えるべきでしょう。つまり、担任不信は学校不信の具体的な現れであるという、そりゃ当たり前か。

担任をふくめた小学校という組織に、保護者はいったい何を求めているのか、それがどう裏切られたから不信感をもつのか。問いの立て方としてはこんなところでしょう。

もちろんその答が金子は知りたい。しかし倒錯的な調査となっているわけですから、その答を追うことよりもやらなければいけないことがたくさんあります。金子だけでなく、各セクションにインタビューにいったみなさんは、それぞれの問題意識や疑問を抱きながらも、自分のパートの原稿書きを優先した調査が精一杯だったことでしょう。金子もそれは同じです。たくさんの問いが頭に浮かび、それを棚上げにしながらの日々でありました。

この時期に考えたのは、我々に対する教頭先生の反応でした。後になって『片小ナビ』の感想のなかで「冷たいと思われたかもしれませんが、教育的配慮だったと思ってください」という意味の言葉がありましたが、確かに「冷たい」というか、「教育的」であったという印象が強いように思います。

「教育的」というのは、つまり、視線・態度・言葉など、色々な面で教頭先生は我々を試すわけです。「きちんとした挨拶はできる?」「何を頼みたいのかきっちり説明できる?」「御礼の言葉はちゃんとと言える?」「礼儀としてこちらの都合も推し量っている?」——等々。そういったいわば「試験」を課し、我々（金子）がちゃんと答えられたかどうかを常に確認する。まちがっていると不機嫌、だいたいできているとまあまあ笑顔を見せてくれる。特に金子なんか世間ズレしていませんから、教頭先生からすれば「何なのよこのコ、いい年して言葉の使い方も知らないの?」てなもんだったでしょう。よみがえる義務教育時代の記憶。職員室に呼び出され、先生の椅子の横で小さくなっていた金子。

人に対して教育的になれるというのは、逆にいえば自分が解答をもっているということです。少なくとも自分のもっている価値観が正解へ向かうベクトルをもつということは確信している。これは教頭先生の態度やなんかだけでなく、性教育（というか男女平等教育）についてのインタビューの時に強く感じました。あるべき男女共生社会への道筋があり、自分はそのベクトルをきちんと内面化しているはずだ、という確信が、教頭先生の言葉から感じ取れました。こういった印象は、実は教頭先生だけではなく、インタビューに応じてくれた先生方みなさんに、大なり小なり共通する感触でありました（RG先生は除く）。その匂いが最も濃かったのが教頭先生ということで。ですからこれは教員個人のキャラクターではなく、学校という集団がもつベクトルなのだと解釈したいと思います。なんだか、当たり前のことをくどくどと記述しているような気がしますけど。

いずれにしても、金子の頭の中でおきた色々な疑問や仮説は、それが確かめられることもなく、しかもほとんど直結しない形で『ナビ』づくりが最終段階に入っていくわけです。「こりゃ絶対ツボをはずすぞ」というのが、原稿を書いているときの金子の率直な気持ちです。ところが幸いなことに、『ナビ』は別の意味でツボをついていたのですね。

6.『片小ナビ』作成

『片小ナビ』は学校が保護者に配布する公的な文書です。しかしそれを書くのは外部の我々。この齟齬が原稿チェックの時点で膨大なクレームとしてはね返ってきてきました。しかしその齟齬は、事実関係の間違いとして現れてきただけではありませんでした。事実関係の齟齬はこちらの単純なミスですから、まあ面白くも何ともない修正作業にはなります。興味深いのは、取りあげ方のチェックや表現のチェックです。そしてこのチェックされた理由を考えることによって、片山小学校のもつ文化が肌でわかってしまうのです。片山小学校の姿がおぼろげながら見えてきたのは、インタビューや入り込みの場面ではなく、『ナビ』の原稿チェックの場面だったわけです。

みなさんが苦勞して書き上げた原稿ですが、没になったものは多数、改訂に至っては数知れず。クレー

ムのひとつひとつが片山小学校の姿を物語るものでした。

ここでは金子の目から見て象徴的だと思うものをいくつかあげてみましょう。表現を変えた原稿をひとつ、没になった原稿をふたつ。

Q22 家庭のプライバシーや個人情報のあつかいは？¹²⁾

原題は「教員や保護者のプライバシーの問題」でした。しかし、内容は個人情報保護条例に多くを割いていること、「(教員の) プライバシー」という語感が「教師にもプライベートな時間ちゅうのがあるんじゃない」ととられかねないことから、タイトルを変更し、内容も若干変えました。

コラム 小学校の先生になるまで¹³⁾

没の理由は、「学校は先生だけで支えているわけではない」でした。校務員さん・養護の先生や介助員・事務の方などみんな支えているのだから、「先生」だけを取り上げるのはおかしいというわけです。

「でも単なるコラムですよ」といってもダメでした。早々に退却。

コラム 教員の転勤¹⁴⁾

先生の転勤について書いたコラムです。先生は10年サイクルで移動するのですが、「確かにそうなのだが、実際には短かったりするわけで、もし3,4年で転勤する先生がいたときに、保護者が『なんかあったのかな』と思うかもしれない」という理由で没になりました。

この3つに共通しているのは、非常に防衛的な態度だということです。

教師にもプライベートな時間があるのは当たり前で、語感がそうとられたとしても理念的にはさして問題があるとは思えませんが、そこを一定以上に気にしているように見えるQ22。学校は「先生だけで支えているわけではない」というのも当たり前で、コラムで教職免許法を取りあげただけで、「それでは学校を支える主人公が『先生』だというふうにとられるかもしれない」と警戒した「コラム 小学校の先生になるまで」。

これらの過剰に敏感な態度だととれる理由が、「コラム 教員の転勤」で推測できる。金子なりの表現でいうと、片山小学校は「誤解を招きたくない」のだ、もう一歩進めていえば、「痛くもない腹を探られたくない」のだ、ということになります。

もちろん人事の問題ですから「痛い腹」だってあるのかもしれませんが、全てがそうだというわけではないでしょう。でも、そこを勘ぐられることを嫌がる。実際には何もなかったとしても。

夾雑物はいろいろあります。Q22は、タイトル・内容を変えた方が文脈からして確かにスッキリしました。「コラム 小学校の先生になるまで」は、校長がMR先生でなかったら、もしかするとOKが出ていたかもしれない。そんな不確定要素を勘案したとしても、「痛くもない腹を探られたくない」という防衛的な態度に終始しているという金子の印象は変わりません。

MR校長先生にインタビューしたときに、「片山小学校の雰囲気は？」と尋ねました。校長先生は「問題行動は少ない校区だと把握している。家庭がしっかりしている地域だと思う」と答えました。金子もその通りだと今のところ考えています。JRの官舎が7割近くを占めることもあって、低所得者層の少ない校区。少なくとも表面的には重大な問題をかかえている校区ではありません。

それでも、「子どもを人質に取られている」という言葉に表されるように、何か学校に対する保護者の不信感がある。それが陰に陽に学校の腹を探る姿勢になっているのではないか。片山小学校は保護者に対して後ろめたさをもっている学校だとは金子は見えていないのですが、それでもやっぱり、痛くもない腹を探られるのはイヤになるでしょう。『片小ナビ』の表現や内容に対するチェックの大きな特徴は、やはり保護者に対しての防衛的な態度であると思います。

フィールドワーカーの基本とされる「無害な中立者」として我々は片山小学校に入ったわけではなく、いってみれば「有益な協力者」たらんとしたこと。これが、小野田プロジェクトのユニークな点でした。我々は「片小ナビ」をつくるために片小でフィールドワークを行ったわけで、これは何度か述べたように

倒錯したあり方です。しかしこの倒錯があったからこそ、金子は、片山小学校の防衛的な態度を肌で感じることができました。苦労はしましたが、あれだけのチェックをされて本当によかった、大きな収穫でした。

ところが、この収穫を『片小ナビ』作成過程で生かせなかった。予想をはるかに超える原稿へのクレームに驚いた時点で、これからは退却戦だ¹⁵⁾ という方針を勝手に金子が出してしまったからだ、というのもあります。事実、それ以降は片小チェック・PTAチェックをノータ임で取り入れ、しまいには自主規制までやりました。無抵抗服従主義でした。

ただ、もっと闘う姿勢をこちらがもったところで、おそらくどうしようもなかったでしょう。それまでの収穫をどう生かせばいいのか未だによくわかりませんし、もしかしたら『ナビ』という形式にはそんなことは必要ないのかもしれない（三郷小ガイドのように）。

でも、『片小ナビ』の収穫は、『片小ナビ』が沈黙した部分にあるのだと思います。そぎ落としてしまった原稿や変えてしまった表現、『ナビ』としては語りえなかった先生やPTAの人々の態度、そんなのを全部ふくめて何かの形でまとめなければ、『片小ナビ』の評価としては不十分だと思います。

7. 仮説

片山小学校と保護者との関係を、金子のみたものからまとめてみます。

片山小学校は、先に書いたとおり、「保護者が学校にいつ来てもらってもかまわない」という姿勢です。そして、ベクトルとしては「正しい方向」を向いているという確信を持っているように見えます。つまり、学校側がきちんと保護者に対して教育方針なり指導のあり方なりを説明すれば、実際問題やましいことはないわけだし、保護者に理解してもらえるはずだと思っている（RG先生は違うかもしれませんが）。

しかし、保護者はなかなか学校に行きません。参観懇談の出席は半分以下だし、それも高学年になるほど出席率が下がってくるようです。「もっと学校に来てくれてもいいのに」というのが6年生の担任の言葉でした。

表面に出てくる保護者の不満は、学校からすればのはずれに見えることもあるようです。具体的には、校長が愚痴っていた「集団登下校問題」¹⁶⁾ です。吹田市内でなんだか不審者が暴れて、市内の各小学校は集団下校をしたのだが、片山小学校はいつも通り帰宅させた。すると保護者から「なんで集団下校させないのか」という不満が出て、「ダメ校長」呼ばわりされてしまった(?)。そんな事件です。

問題はふたつあります。

ひとつは「集団登下校」の安全性について。「集団登下校」は、迷子にならないとか、ドブにハマった時に助けてもらおうとか、そんなことには有効でしょう。でも、包丁を持った人間が突っ込んできたときには、被害が拡大することではない。羊の群にオオカミが突っ込むようなものです。「集団」だから一概に安全だとは限りません。集団下校を要求する側には、そんな視点が欠けている。

もうひとつは、出てきた不満が建設的な議論に結びついていかないということです。

集団登下校とはどういう意味があるのか。何については有効で、何については無効な方法なのか。そういう議論には全く結びついていかないように見える。いっぱなし、いわれっぱなし、時が過ぎれば熱さも忘れる。つまり、一種の「イチャモン」¹⁷⁾ をつけられているわけです。

少し飛躍してみましょう。

何か保護者の不満が噴出するときは、それは建設的な議論になっていく場合は少なく、集団登下校の場合のように、多くの場合は「イチャモン」の形をとっているのではないかと。——「イチャモン」をやりすごすには、問題を解決する姿勢ではなく、弱みを見せずに相手をなだめすかすという姿勢になります。建設的な態度よりも防衛的な態度の方が必要となる。『片小ナビ』作成の過程での防衛的な態度は、つまり、イチャモンを恐れんが為だった。

建設的な問題提起であれば、学校はいくらでも喜んで相手になるはずです。インタビューをとった先生

からはそんな姿勢が常を感じ取れました（RG先生は除く）。でも、イチャモンはつらいですね。防衛しようという気にもなるでしょう。

ここまでかなり推測に推測を重ね続けてきました。ここまで来れば、もう少し重ねてみます。

「イチャモン」をつけるということは、その具体的な標的はただのきっかけに過ぎず、真の原因となる不満を恒常的に持っているはずだ、ということになります。じゃあ、保護者はなぜイチャモンをつけたいのか。要するに、イチャモンを生み出している不満は、根元的には何なのか。

もう一丁、推測に推測を重ね、その上に飛躍してみます。

「保護者は、公立小学校を、階層における上昇移動の有効な手段とは見ていない」

これであらうか。

学問は身を立てる手段だといった人がおりますが、かつては確かにそうでした。学校での勉強が立身出世の有効な手段だったし、学校にちゃんと通い、ちゃんと勉強していれば、上の学校に上がることができて、結果いい仕事に就くことができて、人生ウハウハだと、少なくともそう信じられていました。「先生のいうことをちゃんと聴きなさい」という保護者の説教は、「先生のいうことを聴く」ことが人生ウハウハにつながると信じられている状態だから説得力を持って機能するのです。

でも、今はたぶん違います。

こう書いていて、あまりの根拠の薄弱さにビビってきますが、まあ論文じゃないから書いてしまいます。

小学校にきちんと通ってさえいれば「立派な」高等教育を受けられるだけの学力が身に付くと考えている保護者はほとんどいない。先生のいうことをちゃんと聴いたって人生ウハウハになれるとは限らない。じゃあ何で聴かなきゃいけないの？

保護者が学校に求めている学力とは、新聞が読めて九九ができるという意味ではなく、立身出世につながる意味での「学力保障」だとしましょう。しかし公立小学校はそれに対しては有効に機能していない。だったら「やるべきことをやってないくせに」という不満が恒常的にたまる。でもそれを保護者が直接学校に持ち込んだって、小学校の機能は当然それだけじゃないのだから、そして先生方はそれに自信をもっているのだから、整然とやりこめられるのがオチです。

だったら、欲求不満解消のためには、少しでもスキが見えたときに「イチャモン」をつけるしかない。「今のままじゃ学校で何が行われているのかが目に見えない。もっと情報公開すべきだ」という声が保護者から上がったとしても、懇切丁寧に情報公開したからといって保護者の不満がなくなるわけじゃないでしょう。だってイチャモンなんだから。どんなに参観を増やしたって、学校開放したって、今度は別のところに不満が上がってくるだけだということになります。学校もそれじゃたまらないので、防衛するしかない。

『片小ナビ』原稿をやりとりしていたあいだに金子が考えていたことを、今整理してしまえば、だいたい以上のような感じになります。

ある意味「ありがち」な結論ではあります。そして反証となる材料はいくらでもあると思う。この結論に反する材料を金子自身がいくらでも挙げることができます（例えばIT先生の学級通信に対する保護者の好意的な見方など）¹⁸⁾。また別の解釈の仕方がいくらでもあるかもしれません。

ただ、例えば大教大附属池田の保護者が、学校に対してイチャモンに近い文句をつけるなんてなさそうな気もするのです。慶応幼稚舎の保護者だって、たぶん。

8. 終わりに

妙に悲観的な仮説を立ててみました。でも実は、金子はこの仮説をあまり信頼していません。最後に別の可能性を考えてみましょう。

PTAの方々から聴いた不満で目立っていたのは『あゆみ』¹⁹⁾に関するものでしたし、アンケート調査の自由記述にもかなりありました。例えばこうです。

「高学年になっても2段階評価なのは、子どもの理解度合いがわからない。子どもがそれほど勉強の理解度が高くないというのがわからないかもしれないというのはよくないと思う」(ID.0012)

こういった不満は一見、前項の仮説と合致しているように見えます。「相対評価を全面的に持ち込み、子どもの学力を順位として明らかにした方が、保護者の学校に対する信頼感をますことにつながる」かもしれない。だって、「成績が悪い？そりゃ当たり前です。お宅のお子さんは私(教師)のいうことを全く聴いていませんから」という説教が説得力を持ちますから。

でも、この「あゆみ」に対する不満さえ、何か根元的な不満のひとつの現れかもしれないと見れば、どうでしょう。『あゆみ』への不満は、学校に対する不信感のひとつの現れである、と考えるわけです。

この見方をとれば、『あゆみ』を改良(?)しても、それはそれとして終わってしまって、今度は別のところに不満が出てくるということになります。『あゆみ』はモグラたたきのモグラであるということです。逆にいえば、『あゆみ』を変えなくても、別の本質的な部分が改善されれば、『あゆみ』に対する不満もなくなる可能性があります。

別の部分って、どこだろう。そこは「立身出世」と結びついているのか、あるいはもっと別のことなのか。結びついていなければ、全く別の仮説を立てることができるでしょう。今の金子には無理ですが。

現時点でいえることは、「学校に行っても人生ウハウハにはならない」という不満だけで大部分の家庭を括れるほど単純な世の中ではなからうということでしょう。もっと多様な形で不満が沈殿しているのだらうと思います。ただ、沈殿の仕方には一定の様式があるはずで、それを記述することができれば苦労はしないのですが。

小野田プロジェクトは、金子にとって、これまで述べてきたようなことを考えることができたという意味で、興味の尽きないものであり続けてきたし、今でもそうです。しかし、『片小ナビ』でその思考を反映できたかという、もちろんできませんでした。これから『〇〇ナビ』があるならば、何とか反映させたいものだと思っています。『ナビ』という性質上、非常に困難でしょうけど。

最後に、PTAのODさんからの反応を考えて終わろうと思います。

「すばらしいー! こんなにいいものを作っていただいてありがとうございます。本当にここまでたどり着くのに大変なご苦勞があったと思いますが、このような立派な形になってその甲斐もあったのではないのでしょうか。でも本当にびっくりしました! あの原稿がどのような魔法をかけて見違えるような冊子になったんでしょうか! でも1ページ1ページがみなさんの努力の結果ですね! 小野田先生や金子さんにもどうぞよろしくお伝え下さい。昨日PTA室でみんな感激していました。」²⁰⁾
(OD) (下線は金子)

誉められるのは嬉しいのですが、問題は下線部です。どうしてって、金子は「魔法をかけ」たおぼえはないから。

金子がやったのは、基本的には文章の手直しとチェック部分の書き直しだけで、内容にはほとんど手を加えていません。第1稿の時点で、金子の目からすれば「魔法をかけ」なければならないほどひどくはなかった。

おそらく、ODさんのいう「魔法」とは、表紙やイラスト、ロゴなどをふくめた装丁全体のことです。内容はどうでもいい。ちょっと手に取ってみたいくなるような冊子になったことをのみ誉めてくれている。PTAも関わりながらつくった冊子がきれいなものに仕上がったことだけを。

必然的に「少なくともODさんにとっては、ナビの内容はそこそこのものであればよかったのではないか」ということになります。つまり、『片小ナビ』が描き出した片山小学校の情報は、必ずしも必要なものではなかった。「あればあった方がいいかなあ」という程度のもの。あれだけの情報を詰め込んだもの

であつても。

こればかりは色々な保護者の感想を聞かないとわかりませんが、このままでは終わらせたくはないなあと、金子は個人的には考えています。

<注>

- 1) どちらも当研究室の大学院生。当時M1。
- 2) 当研究室が昨年学校訪問に行った大阪府守口市の中学校。訪問した際、暴れる生徒を校長先生が羽交い締めにして止めるというシーンを全員が目撃した。学生の感想文には「アレは体罰じゃないのか」「怖い学校だ」「中学校はこんなもんだろう」といったさまざまな思いが綴られていた。
- 3) 『片小ナビ』作成についての一連の活動は当初「小野田プロジェクト」「片小プロジェクト」「ガイドブック計画」等、さまざまな呼ばれかたをしていた。
- 4) 『片小ナビ』を題材にして修士論文を書いていたIMが、阪大人間科学部の「修士論文構想発表会」の席上で副査のID教授に尋ねられた一言。
- 5) 『片小ナビ』第一版p4「完成にあたって」(片山小学校長 森史郎)の一部。
- 6) 単純に暴言である。
- 7) 本稿執筆後約1年半を経過した現在、この印象は変わっている。誰もやりたがらないポジションを、いつのまにかやらされる流れになってしまい、忙しい日常の中で無理矢理活動時間をひねり出している人々だと見えている。
- 8) 片山小学校の障害児学級は「太陽学級」といい、教員3名・介助員3名で運営されている。週2時間「合同科目」という「社会性をのばす」ための授業時間があり、太陽学級に在籍する全学年の子どもたちが集まる。我々が継続的に入り込んだのはこの合同科目の時間である。
- 9) 2001年度まで、4年生以上については「クラブ活動」が週に1時間組まれていた。2002年度からは週5日制にともなって2週間に1度程度に削減されている。体育館スポーツ・屋外スポーツ・手芸・将棋などのクラブがある。
- 10) 校長がこの言葉を述べた次の瞬間、もちろん教頭が止めていた。
- 11) 9月に入って「今日こそは」ということでRG先生にインタビューの申し込みに行った際、「シッ、シッ」という調子で手を振り、追い払われる経験をした。そのあまりの拒絶反応は、かえって清々しい思い出となっている。
- 12) 『片小ナビ』第一版p.64に掲載されている。
- 13) この没コラムは、教員免許状をとるために必要な授業・実習・採用試験などについて説明したものだった。執筆は学部3年生。
- 14) 吹田市の小・中学校の場合、新任の時は6年目、それ以降は10年目が転勤の目安とされている。このことについて述べたコラムだったが、本文中の理由で没となった。執筆は学部3年生。
- 15) 粗原稿を初めて片山小学校へ持っていった時点で、問答無用で没になった原稿が2,3あった。このまま行くと『ナビ』完成すらしらうと考え、当研究室内で「クレームに抵抗するのはやめよう」と申し合わせ、改訂を重ねていった。この頃の合言葉が「退却戦」。
- 16) 片山小学校は集団登下校をほとんど行っていない。このことについてしばしば保護者から不満の声が校長の耳に届くようだ。
- 17) 小野田正利「学校苦情への対応と処理体制の確立を」日本教育制度学会『教育改革への提言集』東信堂、2002年11月、および小野田正利「学校不信と教育紛争の危機管理～イチャモンの分析を通して」榊達雄先生退官記念論集『教育自治と教育制度』大学教育出版、2003年3月を参照。
- 18) IT先生はほぼ毎日学級通信を発行し、学校での子どもたちの様子を保護者に伝えている。これは非常に評判がよく、片山小学校の「いい先生」として、真っ先にIT先生の名が上がる。IT先生のクラスに子どもが配属された経験のない保護者も、IT先生のクラスに入ることを望んでおり、「学級通信」の類がどれほど保護者に求められているかが伺える。
- 19) 片山小学校の通知票の名前。吹田市内の小学校の通知票は全て『あゆみ』だが、内容は各学校によって異なる。なお、この『あゆみ』の評価法は、2002年度から高学年については3段階評価となった。

20)『ナビ』完成直後、当時PTAの副会長だったODさんから届いたメールより転載。

<引用文献>

小野田正利2002「学校と地域の関係づくりにおける研究者の役割～『片小ナビ～保護者のための片山小学校ガイドブック』づくりから考える」 『日本教育経営学会紀要』第44号pp.54-65.

An Analysis Developed in the Process of Designing Kata-sho Nabi : Katayama Elementary School Guidebook for Parents

KANEKO Ichiro

ONODA Masatoshi

The Laboratory of Educational System and Organization in the Graduate School of Human Sciences, Osaka University, to which the authors belong, has produced annual brochures titled Kata-sho Nabi since the school year 2000. The brochure is a guidebook for parents at Katayama Elementary School in Suita City, Osaka, and it consists of four parts: (1) What is Katayama Elementary School like?: its current state and school objectives for the future; (2) What can parents do for the school and what should they know?; (3) Some information and data about education in the school; and (4) Phone directory, address book, folder, etc. The first edition was issued in April 2001, and the second one in February 2002. Both were distributed directly to all the children in the school (about 1100). We are currently editing the third edition, which is to be issued in February 2003.

Kaneko writes most of this article based on his field notes and interview records accumulated in the process of producing the first edition in the summer of 2001. Through the research in this school, the authors have observed somewhat a defensive attitude to parents on the part of the school. This paper describes how the school is concerned about what it regards as “unreasonable” demands from parents.